

## 武吉次朗先生の「新語が映す中国」⑦

### 「文胆」 中国経済新聞 071015 掲載

九州特産のぶんたん（文旦）のことではない。中国語版ウィキペディアによると、国家指導者の演説や論文原稿の執筆者の俗称、とある。一九九一年春、鄧小平の意を体し上海で改革の論陣を張った皇甫平（三人のグループ筆名）が有名だ。

近年「文胆」はもっと広義に解釈されており、指導者のブレーンを指すのが一般的のようだ。ちなみに中国語の「胆」は「胆嚢、肝」のほか、まほう瓶の中瓶なども言うので、「文胆」はさしずめ「知恵袋」か。

このところ内外で注目されているのが胡錦濤主席の「文胆」とされている兪可平氏だ。

兪氏は今年四八歳。共産党中央編訳局の副局長兼比較政治・経済研究センター主任として、トップに直結するシンクタンクを主催している。また北京大学の政府創新センターの主任も兼ねており、学術機関が地方政府の活動を評価し授賞するというユニークな方式を編み出した。昨年暮れには『民主主義はすばらしいものだ』と題する論文集を刊行、その序文が中国の主要メディアに転載され、政治改革へのシグナルかと話題を呼んだ。

さらに、九月十七日の北京日報に「思想解放と政治進歩」と題する論文を発表し、中国における民主主義は、普遍的価値である自由・平等・人権を踏まえつつ、共産党内部の民主化を先駆けとして漸進的に進められるとし、このようなモデルを「増量民主」と名づけた。この新しい理念は今日（十月十五日）開幕の中国共産党第十七回大会が打ち出す方針に、何らかの形で反映されることだろう。

「文胆」が重視されるのは、兪氏個人の役割だけではない。五年前に胡錦濤指導部が発足してすぐ、党中央政治局はほぼ毎月一回のペースで「集団学習会」を開き、いろいろな分野の専門家を講師に招いてレクチャーを受け、質疑応答と議論を重ねてきた。テーマは法律・経済・科学技術・教育など多彩で、毎回、開催の翌日には新華社が内容を報道する。

このような仕組みは、党のトップが専門家の提言を重視している表れであり、学者が政治・経済・社会にわたる改革の枠組み設計に参画することにもなる。言い換えると、政治家と知識人の新しい協力関係が制度化されつつあるわけだ。

振り返ってみると、中華人民共和国の建国以来、知識人がこれほど重視される時代は、これまでなかった。「ブルジョア・インテリ」として差別され、時には迫害さえされてきた。「文化大革命」期間がその最たるものだった。党の知識人政策の大変化は、政権党の成熟度を示すものともいえる。

その反面、知識人・専門家の側には、権力におもねって「上意の解説者」になるのではなく、信念をもって主張する胆力が求められる。同時に、異なる見解を述べあい論争する中で真理を追究する「学問の自由」が保障されねばなるまい。